



Title	移動の方向を示す前置詞及び前置詞的副詞 : toward v.s. down, up
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外大英米研究. 1985, 14, p. 125-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99085
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

移動の方向を示す前置詞及び前置詞的副詞

—— toward V.S. down, up ——

上 野 義 和
(1984 9)

〈はじめに〉

- 英語には *across, in, over* など、名詞句をそれ自身の目的語として支配しても、又名詞句を伴わず単独の一語として生じてよい語の一群（以下、前置詞的副詞とよぶ）と、*at, from, with* など、必ず名詞句を目的語としてとらねば生ずることができない語の一群（以下、前置詞とよぶ）とがある。今日、何故前者には複数の機能があり後者には単一の機能しかないのか、ということを歴史的に考えてみる。
- 前置詞及び前置詞的副詞の中には、移動行為を表わす動詞と共に起して移動の方向を指し示す語がいくつかある。これらの中から *toward, down, up* の三語をとり上げ、これらの語のもつ意味素性をとり出すことによって上記の現象とのつながりを論ずることとする。

—— 1 ——

(1 - 1)

まず次の文をみてみよう。

- (1) Jack went *across* the street.
- (2) Jack fell *in* the water.
- (3) Jack jumped *over* the fence.

上例において、*across, in, over* に後続する名詞句を削除しても、次のように各々文法的文として成立する。

- (1') Jack went *across*.

(2') Jack fell *in* .

(3') Jack jumped *over* .

他方、次のような文

(4) Jack shot *at* the target .

(5) Jack came *from* Texas .

(6) Jack cut an apple *with* a knife .

から *at*, *from*, *with* が支配する名詞句を取り除くと、

(4') * Jack shot *at* .

(5') * Jack came *from* .

(6') * Jack cut an apple *with* .

の如く、いずれも非文法的文になってしまう。つまり、*at*, *from*, *with* は名詞句を同伴しなければ一人歩きができないのである。このように、ゼロ表現 (zero expression) が許されるか許されないかの基準がどこにあるかについて、例えば G. Leech (1974, p. 187) は、それは前置詞と同形の前置詞的副詞があるかどうかという点にある、と言う。*across*, *in*, *over* は(1)~(3)においては前置詞、(1')~(3')においては副詞として機能しうが、*at*, *from*, *with* には前置詞の機能しかないからだ、というのが Leech の主張である。たしかにこの主張は共時的には事実を正しく指摘している。しかしながら、上記の現象を歴史的に見れば、Leech の主張はあくまでも単に結果を述べただけのものにしかすぎない、即ち、それは何故かという問いには何も答えてはいない。

(1 - 2)

前置詞 (preposition) とは、その名 (Latin 'prae' before + 'positio' position) が示す通り、それが支配する語の直前に置かれる語をいう。しかし、場合によっては文や節の最後尾に置かれることもしばしばある。

(7) This is nothing to joke *about* .

(= This is nothing *about* which one should joke .)

同時に又、古風な文体や詩的表現においては、支配する語の直後に置かれることもある。

- (8) For having but thought *my heart within*

A treble penance must be done. — Scott

- (9) As the boat-head wound along

The willowy hills and fields among. — Tennyson

この語順は、主に複数の音節をもつ前置詞に関して以前はよく生じたものであり、ラテン語やギリシャ語のみならず、古代ノルド語 (Old Norse) や今日のスカンジナビア諸語にもしばしば見られるものである (C.T. Onions, 1971, §127.2, §133)。この構造は今日の前置詞及び前置詞的副詞の起源を語るものとして重要である。前置詞、前置詞的副詞とひと言で言っても、その起源は、例えば、単独前置詞 (simple preposition) と副詞との結合によるもの (e.g. *into*, *out of*, *within*, *without*), 元々は句形式であるもの (e.g. *beside* < *by* + *side*, *aboard* < *on* + *board*), 現在分詞であったもの (e.g. *concerning*, *during*, *notwithstanding*), 過去分詞であったもの (e.g. *except*, *past*), 形容詞であったもの (e.g. *like*, *next*, *round*, *save*) など種々さまざまである (Onions, § 100.3) が、今日の前置詞的副詞とよばれる語のうちの数多くのものは、本来副詞の機能しかなかった。例えば、*in* を例にとれば、

- (10) He is the town *in*.

のように、名詞句より後に置かれ、直前の名詞句とではなく、それをとびこえて動詞と結びついていた。そしてそれらにはさまれた名詞が斜格 (oblique case: 主格以外の格) の屈折語尾をもつことによって、(10) を例にとれば、‘the town’ は ‘at a place’ のような意味を表わすことができた (Onions, § 127)。とはいっても、その意味は弱いため、それを補足する役を担うのが副詞の *in* なのであった。*in* は ‘in a place’ のもつ場所・位置の概念をより強く、即ち、より具体的に示した。何故なら *in* は「内部」という、位置を指し示す明確な意味をもっていたからである。ところが、屈折語尾が水平化されていくにつれて、動詞と密接に関係しあっていた副詞は屈折語尾がはたしていた役目も兼ねるようになったがために、名詞とも深いつながりをもつようになっていった (Onions, §128)。

名詞の屈折語尾がもつ場所概念の意味の弱さと副詞のもつ場所概念の意味の強さとの力関係が相剋作用を起こし、屈折語尾の消失に拍車をかけ、「副詞→前置詞」という変遷を促したのであろうが、結果的に見れば、場所を示す機能をもつものが二つ並んでいれば力の弱い方を余剰的なもの（superfluons : G. O. Curme, § 62）と見なし、力の強い方だけを残すということになった。

以上のように、本来は副詞の機能しかなかった語が次第に前置詞にも転用されるようになったものが、今日前置詞的副詞と呼ばれるものである。しかし、この歴史は元来が副詞であった語に関してだけであって、今日前置詞のみの機能しない語にはあてはまらない。英語と同じインドヨーロッパ語族の一つであるサンスクリット語には、奪格（ablative case）、所格（locative case）、具格（instrumental case）が今日なお残っているし、又同じ語族に属するラテン語にも‘*Puella mensam reginae rosis ornat*’（= The girl decorates the queen's table *with roses*.）⁽¹⁾のように、屈折語尾だけで「手段」の意味を示す具格の用法が見い出される。このことは英語にも、当然あてはまるわけで、後述するように OE には勿論のことそれをさか上ることずっと以前にも屈折がより盛んな時代があったと考えられる。OE が完全屈折（full inflection）の時代であったとよく言われるとはいえ、それはあくまでもそれ以降の英語と比較しての話しであることは、OE の時代にはすでにかかなりの数の前置詞が現われてきていることから明らかである。とはいえ、OE はまだまだ分析言語と呼べる状態とも程遠く、以下に見る如く前置詞と名詞の屈折形とが並行、あるいは入り混ざりつつある状態であったと考えられる。例えば、*fōt* (= foot) に格語尾を添えた具格 *fōte* (sing.) にともに、母音変化による格変化形である *fēt* (sing.) という与格が互いに独立した形として併存するような現象もあるにはあった（Quirk and Wrenn, § 48）が、他の多くの場合には具格という独立した格形態の範疇はすでに消滅し、与格がその役を兼ねるようになっていた（Quirk and Wrenn, § 105）。従って、特定の場合（Quirk and Wrenn, § 48, § 50, § 65 f.）を除けば、OE における‘instrumental’は与格がもつ単なる一機能（あるいは意味）を示すにすぎない。

さて、OE では「手段」を表わすのに、

(11) *mundum*⁽²⁾*brugdon*

(= you brandished *with your hands*)

(12) *worhte Ælfred cyning lýtle werede geweorte*

(= King Alfred built a defence-work *with a small force*)

のように前置詞を伴わない構造と

(13) *erede mid horsum*

(= ploughed *with horses*)

(14) *him cēnlīce wið feaht lýtthum werode*

(= he fought boldly against him with a little force)

のように前置詞 *mid*⁽³⁾(= with) を伴う構造の両方が使われていた (Quirk and Wrenn, § 112)。 (11), (12) における格語尾 ‘-um’, ‘-e’ が今日の前置詞 *with* に相当するわけだから、今日の英語において *with* を残してその目的語を省略することは、(11), (12) で言えば格語尾だけ残してそれが付着すべき肝心の本体にあたる名詞の基体を省略してしまうことに等しいことになってしまう。つまり、

(15) *Ic hine sƿeorde swebban nelle — Beowulf*

(= (15) I won't slay him *with a sword*.)

(16) **Ic hine —e swebban nelle*

(= (16) *I won't slay him *with*.)

(15) が文法的文で (16) が非文である理由は、(15) が文法的文で (16) が非文であるところに帰する。

このようにして古い時代の屈折語尾が消失してゆき、それに代って前置詞が誕生するわけだが、単独の一語としての地位を得たがために、屈折語尾の単なる「埋め合わせ」ととどまらず、ずっと多くの、かつ細かい意味あい (more and finer shades of meaning : G.O. Curme, § 62) をもつようになった。ただ (13), (14) に見られるように前置詞に支配されながらも名詞が屈折語尾をもっているのは、Curme (§ 62) の言葉を借りれば、処格、具格、奪格が英語から姿を消した後

も、後続の名詞は前置詞の支配語であることを示すためのしるし（the sign of subordination to the new prepositions）として対格か与格かいずれかの格変化形として生じていたにすぎない。この頃には、格語尾に本来あった意味・機能が実質的には消失していたわけであるから、このうわべだけの語尾変化がいつ消え去るかは、所詮、時間の問題であった。

——— II ———

（ II - 1 ）

移動の方向を示す前置詞の一つに‘toward(s)’（以下‘toward’）がある。この語は

(17) John walked from the station to the harbor.

にみられるように、出発点から到達点に至る移動の全行程を示す動詞‘walk’と共に起し、

(18) John walked *toward* the harbor.

と云うるし、又

(19) John { $\begin{smallmatrix} \text{headed} \\ \text{started} \end{smallmatrix}$ } *toward* the harbor.

Cf. * John { $\begin{smallmatrix} \text{headed} \\ \text{started} \end{smallmatrix}$ } *to* the harbor.

のように、移動の出発行為だけしか示さない‘head’‘start’等の動詞とも共起する事実から、同時に又、

(20) John walked *toward* the harbor, but gave up halfway.

とも言えることから、*toward* には到達を含意しない「（移動の）方向」という意味素性があることがわかる。この語は OE では‘*tō scype weard*’（=shipward）のように分離して使われることも時にはあった（Quirk and Wrenn, §141）ことから明らかなように、‘to’と‘-ward’の結合体である。‘to’は、勿論、屈折語尾消失の代償として誕生した前置詞で、今日、次の文

(22) John ran *toward* Mary.

(23) * John ran *for* Mary.

のように、本来それ自身では場所を示しえない人間を指す名詞を目的語にとることが *for* には許されないが *toward* には許される現象も *to* に負うところが大きい。これらの事実から、この複合語の本質は *to* にあると考えられる。

英語には *toward* と同じように移動の方向を示しうる語として *up*, *down* がある。これらの語は、

(24) *John walked* { $\begin{smallmatrix} up \\ down \end{smallmatrix}$ } *the mountain path*, but

quit halfway { $\begin{smallmatrix} up \\ down \end{smallmatrix}$ }.

と言えることから、移動動詞と共にすると方向を示すことに間違いはない。方向を示しうることから、*up*, *down* はいずれも

(25) *Having walked* { $\begin{smallmatrix} up \\ down \end{smallmatrix}$ } *the mountain path*, John

was { $\begin{smallmatrix} up \\ down \end{smallmatrix}$ } *the mountain*.

のように、移動完了時における位置を示しうる。⁽⁴⁾ この両語に関しては、

(26) [+DIRECTION] implies [+RESULTANT LOCATION]

という含意関係が成立する。これらの概念関係は当然、「移動の完了」という概念とも結びついているが故に、

(28) *Time is up*.

(29) *John ate up the dish*.

などの *up* の意義が説明可能になる。⁽⁵⁾

toward との比較に移る。*toward* は

(30) * *John went toward*.

のように、支配語なしで単独で生ずると非文を生むが、他方

(31) *John went* { $\begin{smallmatrix} up \\ down \end{smallmatrix}$ }.

up, *down* は単独で生ずることができる。(30) が非文で(31) が文法的文である

理由として、(1-1)に引用した如く、*toward*（究極的には *to*）には前置詞の機能しかないのに対して、*up*、*down* には前置詞及び副詞の二つの機能があるという事実を Leech は挙げる。しかし、意味的には三語とも「移動の方向」という素性を共有しあっているという点では同等のはずだ。それでもなお、*toward* と *up*、*down* とは統語的には異なった環境に生ずることも依然として事実である。従って、両者の行動の違いを説明できる要因がどこかになければならない。これらの語は確かに方向は示す。しかし *toward* が「どの方向」かに関しては全く無色であるのに反し、*up*、*down* は「垂直」という有色の意味素性をもっている。この素性が両者を区別する最大の要因であろうと考えられる。単純に差し引き勘定すれば後者の方が前者より意味素性の数が一つ多いだけにしかすぎない。しかしこの場合、この一つが大変大きな役割を果たしている。「単なる方向」という概念に比して、「垂直」という概念は「方向指定」という意味において具体的であり、従ってそれだけ意味が強い。逆に言えば、前者は後者より抽象的であり、従ってそれだけ意味が弱いといえる。この意味の強さ、弱さが *up*、*down* には副詞の機能があるが *toward* にはそれが無いという事実につながってくる。つまり、今日の前置詞的副詞が屈折の時代からすでに一語の単語として存在していた原因は、まさにその意味の強さにある。これに対し、今日の前置詞は屈折語尾がその祖であり、屈折の消失によってその誕生をうながされただけの歴史しかなく、それが付着する本体の名詞がなければ単独では生じえないものであった。ちょうど ‘John walks to school.’ における屈折語尾 ‘-s’ に何らこれといった強い意味が無いのと同じような意味で、単なる屈折語尾で表わされる意味はそれだけ弱いものでしかなかった。意味が強かったか弱かったか、即ち単独の一語であったかなかったかということは、その子孫がもつようになった強勢の強さ、弱さにも通ずる。今日 *toward* [təwɔːd] に対して *upward*、*downward*⁽⁶⁾ が違った強勢の位置をもっている理由もそこにある。そして、*up*、*down* が(25)におけるように、状態動詞と共に移動後の位置を示しうるのに反して、

(32) * John is *toward* the harbor.

のように、*toward*に同種の用法が存在しないのも、*up*、*down*にくらべて具体的な方向指定を欠く *toward* の意味的不完全さ⁽⁷⁾に由来する。

〈おわりに〉

今日の英語において、前置詞の目的語が省略不可能、前置詞的副詞の目的語が省略可能である現象は英語の歴史をさか上ることずっと昔の、屈折が盛んであった時代をその源としている。そして、その頃の姿は同じインドヨーロッパ語族のサンスクリット語に歴然と残っている。今日前置詞とよばれるもののうち、例えば *at*、*from*、*with* 等に相当する語をもたないサンスクリット語では、今も名詞の、‘*ablative case*（奪格）’とよばれる屈折語尾で表わされる。⁽⁸⁾ この格が ‘*from-at-with case*’ という英語名をもつことから、前置詞が副詞のような一語の単語が本来の姿でなかったことがわかるだろう。そしてこの一語でありえたかどうかは意味の強さとも関係するということを、同じように「方向」を示しはするが統語的には異なった動きをする *toward*、*up*、*down* を例にとって述べた。

＜ 注 ＞

- (1) 『新英語学辞典』 p. 2, p. 53 ff.
- (2) 手段、方法という概念は「様態」という概念につながりをもつようになったため、屈折語尾の‘-um’, ‘-e’ もそれぞれ名詞、形容詞に付着し *hwīlum* ‘at times’, *hlūde* ‘loudly’ などの副詞表現を生み出すことになった (Quirk and Wrenn, § 112, § 166)。
- (3) OE *wið* は ‘against, Opposite’ の意で今日の *withdraw*, *withhold* 等に受け継がれているが、OE *mid* は「随伴、同伴」が原義で、やがては *wið* に凌駕され、今日の *midwife* (産婆) にその名残りをとどめるにすぎない。
- (4) 「完了時における位置」というのは、‘John was *in* the room. (＜ John went *into* the room.)’ におけるような前置詞 (的副詞) の目的語の名詞が指すそのものという意味ではない。たとえば *up* なら、後続する名詞は必ず長さをもったものを示すものでなければならない故、ここで言う「位置」はその長さをもったものの中の一点 (some higher point) を意味する (Gruber, 1976. p. 28)。
- (5) Cf. Ueno, Y., ‘A Study on the Modern English Preposition and Verb-Adverb Combination’ in *Studies in Linguistic Change*.
- (6) *báckward*, *fóruward*, *ínward*, *ónward* 等、第一構成要素が副詞起源であるものはすべてその構成要素が強勢をもち、‘-ward’ がもつことはない。
- (7) *toward* は「到達完了」を含意しないから当然「到達時の位置」を表わせない、という主張は成り立たないように思われる。何故なら、もしこの主張が正しいとすれば、‘John went *to* the harbor.’ に対しても ‘*He was *to* the harbor.’ が成立しなければならないことになるからである。ただし *to* は *at* (‘He was *at* the harbor.’) と同意味的つながりがあり簡単に切り捨てられる問題ではない。

(8) 『新英語学辞典』 p. 153 .

< 参考文献 >

- Curme, G.O. (1963) *Syntax*, Maruzen Co., Ltd. Tokyo.
- Gruber, J.S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*, North-Holland Publishing Company. Amsterdam.
- Leech, G. (1974) *Semantics*, Penguin Books Ltd. England.
- Lindkvist, Karl-Gunnar. (1976) *A Comprehensive Study of Conceptions of Locality in which English Prepositions Occur*, Tofters tryckeri ab Östervåla . Stockholm.
- Onions, C.T. (1971) *Modern English Syntax* (new edition of *An Advanced English Syntax* by B.D.H. Miller) , Routledge and Kegan Paul. London.
- Quirk, R and Wrenn, C.L. (1965) *An Old English Grammar*, Methuen & Co., Ltd. London.
- Ueno, Y. (1982) ' A Study on the Modern English Preposition and Verb-Adverb Combination ' in *Studies in Linguistic Change*, Kenkyusha. Tokyo.
- 『新英語学辞典』 (大塚高信, 中島文雄監修) 研究社, 東京, 1982 .

